

水の琴

森野 水琴

六月の第三日曜日、父の日になると、島根県の隠岐の島でウルトラマラソンが開催される。彼が銀婚式祝いを兼ねて参加するようになって今年で九年目になる。

午前五時に百キロの部がスタート。十キロ地点の小川の向こう側に水琴窟すいきんくつがある。前年のレースで彼は森の木立を走りながら、その調べを聞いた。少し走ると視界が開けて一面の野原。雨水が染み込んで水滴となり、ゆっくり落ちて水面で奏でる調べは、悠久の彼方から届く雨音のようである。

彼は今年のレースの前日にレンタサイクルで現地を見学した。橋を渡ると水琴窟の由来が書かれた立て看板もあり有意義な見学になった。

翌日のレースでも水琴の調べを聞いたものの、百キロ完走は果たせなかった。来年こそは完走と期しながら、練習に励むのであった。

翌年、エントリーに手間取り、後半の五十キロの部に参加し、完走したものの、水琴の調べを聞くことが出来なかった。

そのまた翌年、百キロの部にエントリーしたが、例のコロナ騒動で一年延期となり、さらに一年延期となってしまった。

四年ぶりの百キロを間近に控え、彼の鼓動は高鳴るのであった。

大会当日、スタート十秒前のアナウンス。鼓動とともに静寂のカウントダウンが始まる。スタートの号砲。拍手とともにランナーが走り出す。港の船の汽笛が背中を押す。

今年からコース変更があり、森の木立で十キロの標識を見た。水琴の調べが聞こえない。少し走ると例の野原が見える。見覚えのある郵便局。やはり水琴の調べは聞こえない。ロスト水琴窟。何とも言えない喪失感。ゴールまで、あと九十キロ近くあるというのに。

今年も四年前と同じ五十九キロ地点で関門時刻をオーバーしてしまい、完走できなかった。

三年ぶりに再会できた人もいれば、会えなかった人もいる。また来年と練習に

励むのであった。

そもそも彼が新婚旅行に山陰地方を選んだのは、中学生の時に国語で習った志賀直哉の「城崎にて」というタイトルを思い出し、城崎に行ってみたかったからである。山陰地方をほぼ一週間かけて旅行する中に隠岐の島も滞在先に入れたというわけである。

彼は島を旅するのが好きである。初めての海外旅行もタヒチであった。宿泊先で聞く潮騒は、日頃の喧騒から離れて心地いい。

タヒチに滞在してシュノーケリングを楽しんだのだが、帰国後、スキューバダイビングのライセンスを取得するために講習を受けた。次の海外旅行はオーストラリアのグレートバリアリーフにある島を予定していたからである。どちらもスキューバダイビングの人気スポットである。

ところが海上実習で落第し、ライセンス無いままオーストラリアに行くこととなり、体験ダイビングで我慢することとなった。

その後、無事ライセンスを取得して、初のダイビングツアーは沖縄の慶良間諸島の座間味島ざまみにした。ビーチ近くでのシュノーケリングは魚の図鑑を見ているように楽しかった。

ボートで移動して潜ってみると、透明度四十メートルと言われるだけあって視界良好である。

海中で無重力状態になると母の胎内にいるみたいに心地いい。

沖縄の海が気に入って、六月下旬の梅雨明けを狙って潜りに行った。

海中では音が伝わりやすい。

空気を入れたタンクの底を叩いて注意を促したり、集合の合図にしたりする。口に呼吸装置をくわえているので会話は出来ないのだが、感嘆の吐息は聞き取れる。

魚の大群。サメ。ウミガメ等々。見ごたえのあるものばかりである。

自然とダイバーの表情もほころぶ。

比較的静かなまま時間が流れる。

束の間の贅沢である。

今年も隠岐の島ウルトラマラソンの季節が巡ってきた。

彼には昨年聞きそびれた水琴窟すいきんくつの現状を知りたいという願いもあった。

大会前日の受付会場でみやげ物を出店販売している方々と再会。一年ぶりに時間の隙間が一気に埋まったかのよう。

また会場では昨年会えなかった担当の方と再会。これだから毎年参加したくなる。

昨年からマラソンコースが少し変更になり、目当ての水琴窟よりも手前で十キロ地点。少し走ってようやく平原が眼前に広がる。やはり水琴の調べは聞こえない。水琴窟の表示があったはずの場所は廃屋になっていた。

喪失感に襲われながらも走っていくと、応援に踊っている一行と再会。

「ただいま」と挨拶すると「おかえり」と答えてくれた。

上り坂は神田祭の神輿を担いだリズムを思い出し駆け上った。

朝五時にスタートしたマラソンも七時間過ぎた頃、暑さに脚がもつれて、四十八キロ地点で転倒してしまった。四百メートル先は第二関門であり、給食もあるレストステーションである。何とか駆け込んで関門クリアできたが救護で応急処置を受けた。引き続き走ることとは出来るとのことであったが、再び転倒することを防ぐためリタイアした。

宿泊したホテルの人からの話によると、水琴窟のあった家は空き家になったとのこと。以前撮影した動画で思い出すことになる。

帰宅して動画を再生してみた。懐かしい調べが沁みる。

一度も百キロを完走していないので、来年こそはと練習に励むのであった。

隠岐の島の水琴窟すいきんくつが無くなったせいで、水の音に敏感になった。ついつい水琴の調べを楽しみたくなる。

隣の住宅の一角だろうか、ビニールシートが敷いてあるようだ。雨がシートに当たって奏でる調べに聞き入っている。

あいかわらず、ゆったりした調べが好みで、悠久の彼方にいざなってくれる。

十二月に彼は奈良マラソンを完走した。

翌日、彼は葛城市かつらぎしにある當麻寺たいまでらの西南院さいなんを訪れた。

庭園に水琴窟が二か所ある。

隠岐の島で聞いたものより音量は小さいが、嬉しくて動画撮影した。
当分、水琴窟を訪ねる旅は続きそうである。

六月になり、隠岐の島ウルトラマラソンの季節になった。

彼は久しぶりに隠岐の島で前泊した。

金曜日に現地入りし、空港で昼食後、ホテルまで散歩。

飛行機ではマスクを着用していない客室乗務員も見受けられ、笑顔での接客が嬉しかった。

夜は居酒屋で再会を懐かしんだ。

土曜日は酔い覚ましを兼ねて二十キロ散歩した。水琴窟すいきんくつの跡地で風にそよぐ草を眺めた。暑さにこまめな水分補給をした。

日曜日の早朝五時に隠岐の島ウルトラマラソンがスタートした。

去年は四十八キロ地点で転倒したこともあり、焦らないよう心掛けた。

折りからの雨は恵みの雨になった。

四十五キロ地点になって、「より美しく表現できないか」という自らへの問いかけを繰り返すようになった。自然と笑顔になった。

四十八・四キロ地点の第二関門をクリアし、レストステーションで食事後、再開したが第三関門には間に合いそうもない。沿道の声援に応えながら、「より美しく表現できないか」と自らに問いかける。

やはり第三関門に間に合わなかったが、今後の練習に大いなるヒントをもらった。

ゆっくり高みを目指していくようである。